造反 revolt

東京教育大学東洋史共斗会
情宣機関紙
1968.9.9 No.10

中間総括を深化と自己批判的組織化せよ

東洋史の学友及諸君、我々は全学九月闘争に、我々が教育人にかけた、文部独占、国家権力の攻撃の矛先がかけられていることは之、学校当局の「暴力封じ」の態度によって一定程度の中和み的状況をおけている。学校当局が、ひきのばしをしようと画策した本質的狙いが表面には出ていないことは、それに対する我々の斗争が勝利への前進を意味しているからである。しかしながら学友諸君、注意せねばならぬことは、敵権力にとっての本質的狙いは、我々にとって最も危険な状況であるということである。とりわけ我が東洋史クラスに加えられる教育体制攻撃は、単に一日一度の授業妨害をもってか、ピケ、泊り込みを解実にやるというようなことでは完膚なきまでに粉砕されてしまうということであり、現状認識能力阻止斗争が帝国主義という明確な視点をもち、さらに個人を階級的立場に立たしめること、そしてなかんずく教育を政治的かつ左翼的に組織化することによってこそ勝利的展望がありうるということであった。我々東洋史クラスの状況的な弱点は、この組織論的未形成である

な、又は、「法遵主義」としてのべらべられていることにある。帝国主義内に見られる、日常的現象主義と決定主義の不幸な分裂の根はここにあるのであり、我々は、この分裂を理論的・実践的に結びつける組織を通過に獲得しなければならない。日常性的現象主義は他事件ではあってもナカ条件ではなく、「法遵主義」なる「法遵主義」として結果し、その再生産しか生み出さないのは、斗争が固定的状態に突入したときに必ず見られる停滞現象から脱却できないからである。さらに、所与現象認識の問題自身も、単条件であって十分条件ではない。我々は常に斗いの全体的展望を獲得しつつも、日々の斗争の中で、それを理論化し、深化させ、実践してゆかねばならない。東洋史のムードにのった斗争を完成するものは、日常性的現象主義でも「法遵主義」でもなく、中間総括を深化させる方向での理論的実践でしかないことを我々は確認すべきである。

かかる観点に立って、我々は、反帝国主義の立場を、観念的、現象的、あるいは法遵主義に終らせることなく、現実に作用されたものとしてより一層深化し現実的なものにしなければならない。即ち、そのことは、現実的には、学園的に強りあがる学園斗争、とりわけ日大斗争という中に把握し、どのように支援するか、より積的にちからば、日大斗争と帝国主義打倒斗争の共通項をここに見つけるか、ということである。いつまでもなく、日大斗争は、現実的にブルジョアジーの防波堤をつくりそうとしている斗いであり、学園の大学の矛盾の集約を持つ運動的に斗われている斗いである。帝国主義の立場を、観念的、現象的、あるいは法遵主義に終らせることなく、現実に作用されたものとしてより一層深化し現実的なものにしなければならない。即ち、そのことは、現実的には、学園的に強りあがる学園斗争、とりわけ日大斗争という中に把握し、どのように支援するか、より積的にちからば、日大斗争と帝国主義打倒斗争の共通項をここに見つけるか、ということである。いつまでもなく、日大斗争は、現実的にブルジョアジーの防波堤をつくりそうとしている斗いであり、学園の大学の矛盾の集約を持つ運動的に斗われている斗いである。帝国主義の立場を、観念的、現象的、あるいは法遵主義に終らせることなく、現実に作用されたものとしてより一層深化し現実的なものにしなければならない。即ち、そのことは、現実的には、学園的に強りあがる学園斗争、とりわけ日大斗争という中に把握し、どのように支援するか、より積的にちからば、日大斗争と帝国主義打倒斗争の共通項をここに見つけるか、ということである。いつまでもなく、日大斗争は、現実的にブルジョアジーの防波堤をつくりそうとしている斗いであり、学園の大学の矛盾の集約を持つ運動的に斗われている斗いである。帝国主義の立場を、観念的、現象的、あるいは法遵主義に終らせることなく、現実に作用されたものとしてより一層深化し現実的なものにしなければならない。即ち、そのことは、現実的には、学園的に強りあがる学園斗争、とりわけ日大斗争という中に把握し、どのように支援するか、より積的にちからば、日大斗争と帝国主義打倒斗争の共通項をここに見つけるか、ということである。いつまでもなく、日大斗争は、現実的にブルジョアジーの防波堤をつくりそうとしている斗いであり、学園の大

学の矛盾の集約を持つ運動的に斗われている斗いである。「日大民主化」のスローガンは、単に我々が「既成の大学自治」とともに我々の目指しているのではなく、そこにはっきりと、それを粉砕し、学内権力として斗う学生を実現せしめる問題―学の権力を完結する問題―が顕在化している。それ故に、日大生千万の斗いに加斗した日大当局は、自らの大学支配権力に重期的に売りわたし、連日にわたり機動した弾圧を行っているのだ。日大斗争は特殊「封建的大学」であるから、弾圧が激しくなるのではなく、日大が帝国の大学の総矛盾の集中点であるからこそ、そうなのだ。日大斗争に現われる問題は、教授会、評議会、事務機構等の既得の大学権力の体現者が、学生に対し無権利でありながら、相対的に帝国主義の教育権力と結託し協力して、学生に敵対しているのである。それが帝国主義段階の大学のあり方であり、学生のその斗争は、その前提を問題としている。自己が社会的に有能な労働者として疎外されることに対する反逆、学内の斗争が自己不在のままで決まれることへの怒りは、帝国主義段階の大学そのものを「反帝国主義」という立場に立って粉砕しなければ、解決することはできない。

我々の眼前に展開されている日大斗争は、このことを事実をもって証明しているのではないか。我々教育人もその基本的相違関心であるべき、学友諸君、今日の日大は明日の教育大学なのだ。我々はこの一点を強調的に把えなければ、日大斗争をも、我々の学内斗争の

闘いとして一面的に矮小化することに陥ってしまう。学友諸君、日大の斗いは我々の斗いなのであり、我々の斗いも同時に日大の斗いなのだ。目指すべきものは唯一つ、帝国主義打倒の立場に立ち、既存の大学権力を我々の手で一掃することである。そして学友諸君、日大斗争の現段階的目的の獲得は、単に闘争の一環としてではなく、闘争そのものの勝利をかちとることにすぎない。我々が闘い斗争を勝利させることによって、はじめて、日大、東大斗争に客観的に結合することによって、はじめて、我々の斗争は、筑波移転実力阻止斗争に勝利すべく、中間総括をより一層深化させ、自己批判的に組織化しなければならない。

組織せよ、組織せよ、徹底的に組織せよ!!

筑波移転実力阻止
六・一〇土地確保決定白紙撤回
六・二〇調査に計上決定白紙撤回
マスタープラン委即時解散
全学対策委粉砕
三館完全封鎖をかちとるぞ
前期試験阻止
全学斗争委の結成をかちとるぞ
対学長評議会団交実現
学友は東洋史共闘会議の旗の下に結集し、最後まで斗おう